

別記2

大豆におけるIPM実践指標

管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄		
			昨年度の実施状況	今年の実施目標	今年の実施状況
連作回避（輪作）	輪作または田畑輪換を行う。特に、土壌伝染性病害やマメシンクイガの被害が多発したほ場での連作は行わない。	1			
ほ場衛生	トラクター等の作業機の清掃を徹底する。	1			
ほ場及びその周辺の管理	害虫密度を低下させるため、ほ場及びその周辺の除草等を行う。	1			
伝染源の除去	虫媒伝染性ウイルス病の感染を防ぐため、伝染源となる雑草（クローバ類、マメ科・ナス科植物）を除去する。	1			
土作り	タネバエ・雑草対策として、未熟なたい肥や有機質肥料を使用せず、完熟たい肥等を用いる。	1			
排水対策	黒根腐病及び茎疫病の対策として、額縁排水と合わせ基幹排水溝を設置し、排水を良くする。	1			
	初期生育の確保や土壌伝染性病害予防のため、高畝栽培や畝立同時播種を行う。	1			
健全種子の使用	主要農作物種子法に基づく指定種子生産ほ場で生産された種子や病害虫の発生していない種子を使用する。	1			
適正な品種の選定	病害虫発生が著しいほ場では、これらに対する抵抗性品種を選択する。 ウイルス病抵抗性：スズユタカ、あやこがね、きぬさやか 立枯性病害抵抗性：タンレイ 紫斑病抵抗性：コスズ、ミヤギシロメ、スズユタカ、タチナガハ	1			
初期防除（種子消毒・は種溝処理等）	紫斑病を対象にチウラム水和剤による塗沫処理または粉衣処理等を実施する。	1			
	フタスジヒメハムシ及びアブラムシ類を対象にエチルチオメトン粒剤のは種溝処理またはチアマトキサム水和剤の種子塗沫処理等を実施する。	1			
罹病株の抜き取り	ウイルス病、べと病（全身発病株）、各種土壌病害の対策のため、発病株の抜き取りを徹底する。	1			
収穫・乾燥	紫斑病及び腐敗粒の対策として、成熟後、速やかに収穫・乾燥を行う。	1			
防除要否の判断	ほ場内を見回り、病害虫の発生や被害を把握するとともに、気象予報等を考慮して防除の要否を判断する。	1			
病害虫発生予察情報等の確認	病害虫防除所が発表する病害虫発生予察情報や農業改良普及センター、試験研究機関、J A、市町村等が発行する栽培技術情報等を入	1			

	手し、病害虫の発生状況、発生予測に関する情報を確認する。				
マメシクイガ対策	作付初年目のほ場では被害が少ないので、本種を対象とした防除は行わない。	1			
	連作4年目以上のほ場では被害が大きくなる傾向があるので、効果の高い薬剤を茎葉散布する。	1			
フタスジヒメハムシ対策	初期防除に加え、効果の高い薬剤を茎葉散布する。	1			
紫斑病対策	ミヤギシロメでは種子消毒のみとし、茎葉散布は行わない。	1			
	タンレイでは種子消毒に加え、効果の高い薬剤を茎葉散布する。	1			
	タンレイでは特に連作ほ場で発生が多くなるので、連作を避ける。	1			
農薬の使用全般	薬剤散布の際は、飛散しにくい剤型や散布ノズルを使用するなど適切な飛散防止措置を講じる。	1			
	薬剤の選択に際しては、同一系統薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。	1			
	除草剤の選択の際は、前作に発生した草種が次作で問題になるので、発生した草種ごとに除草剤を選定し、発生状況に応じて適切に散布する。	1			
ハト害の回避	耕種的防除法として、防鳥テープ、爆音器、防鳥網、地域一斉は種等による被害分散等の対策を講ずる。	1			
罹病残さの除去	収穫後、罹病残渣を集めてほ場外へ除去する。	1			
作業日誌	各農作業の実施日、病害の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等の栽培管理状況を作業日誌として記録する。	1			
研修会等への参加	I P Mに関する研修会に参加する等、I P Mの実践に必要な知識の習得に努める。	1			
合計点数		28			
<p>[参考]</p> <p>評価基準</p> <p>○合計点数 20点以上：I P M実践度A（I P Mの実践レベルが高い。）</p> <p>○ “ 15～19点：I P M実践度B（I P Mの実践レベルが中程度。）</p> <p>○ “ 14点以下：I P M実践度C（I P Mの実践レベルが低い。）</p>					
			評価結果		